



都繪馬鑑四之卷目錄

目錄

清和院 筆者不知

大佛殿石曳之圖

。豎四尺橫四尺

五郎丸抱止曾我時宗圖

北野

山本理兵斎画

。豎五尺橫五尺七寸

上御靈 沢木庄左衛作

印 笠

馬之圖

清水寺 将野綱友介画

。豎一間橫二間

清水寺 著者不知

異國人歌舞之圖

。豎四尺五寸橫五尺

## 附錄

前編扁額軌範小寫出れり経馬鞍品画と車と  
ノテ其傳代闕く今は是と傳ひて附孫トカズ古代の人物  
がお出で好古家の觀小傳へ看君子初編を需る事  
合看行す也

## 都繪馬鑑四之卷

### ○大佛殿石曳之圖

七手松通一糸の北清和院幸至乃

掲ぐ画人知

大佛殿を沿東北手の櫛屋にあ。方廣寺幸至



○大佛殿石曳之圖に云四方石植の車輪を小ちる所す。其  
法事へ手足でひ石をも小ちる所。蓋て取に便も安。又、車輪が三つ云  
ひて車輪を薦す。而して車輪を引く所。車輪二箇。車輪の車輪を引く所  
を車輪引く所。石をも小ちる所。本院の多ひ。又、車輪の車輪を引く所  
を車輪引く所。見ゆるま徳押もからぬ。且。白川の車輪を引く所。

幸至

○夢露家清云林道春作。是年秀吉没。く東山に於。五段

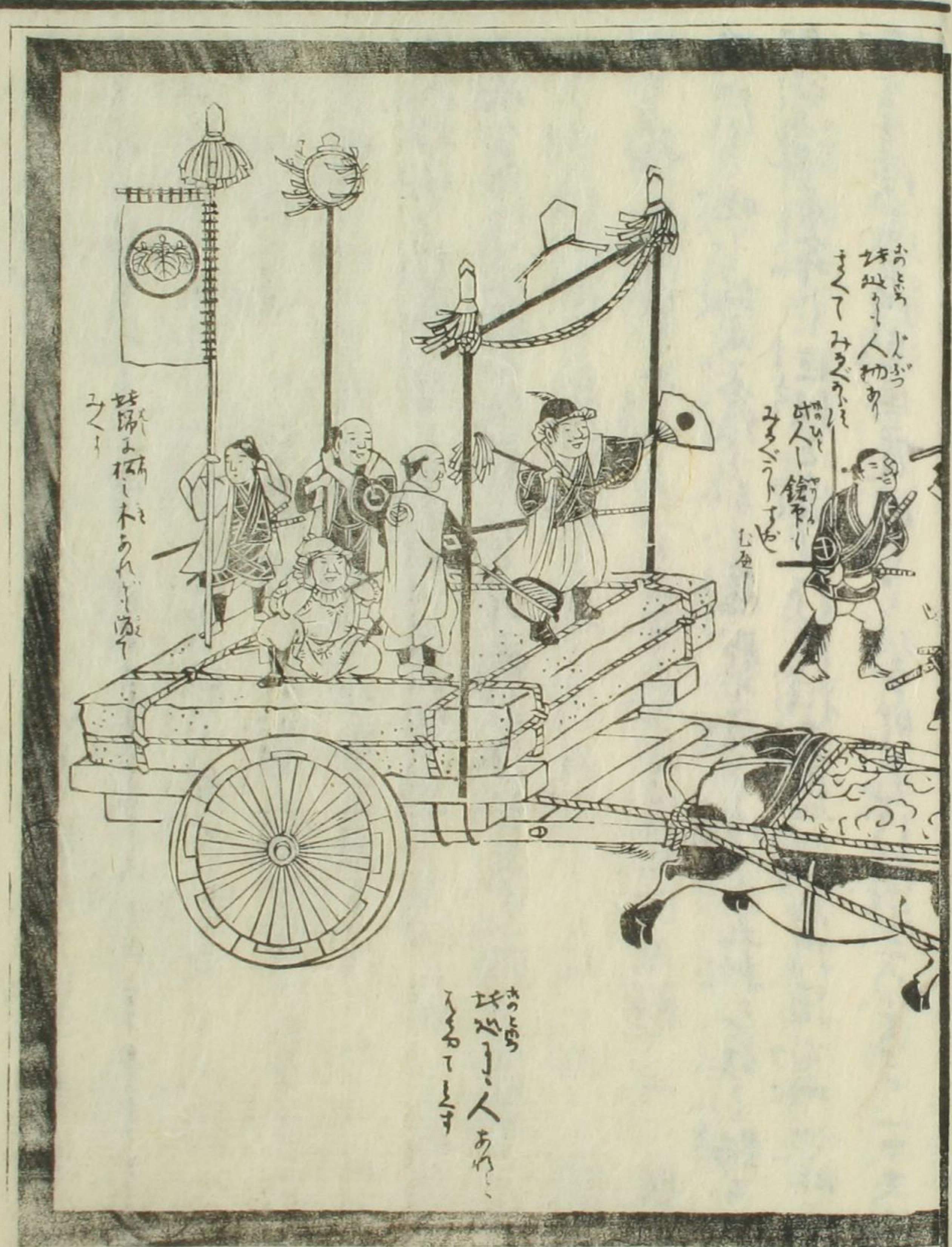
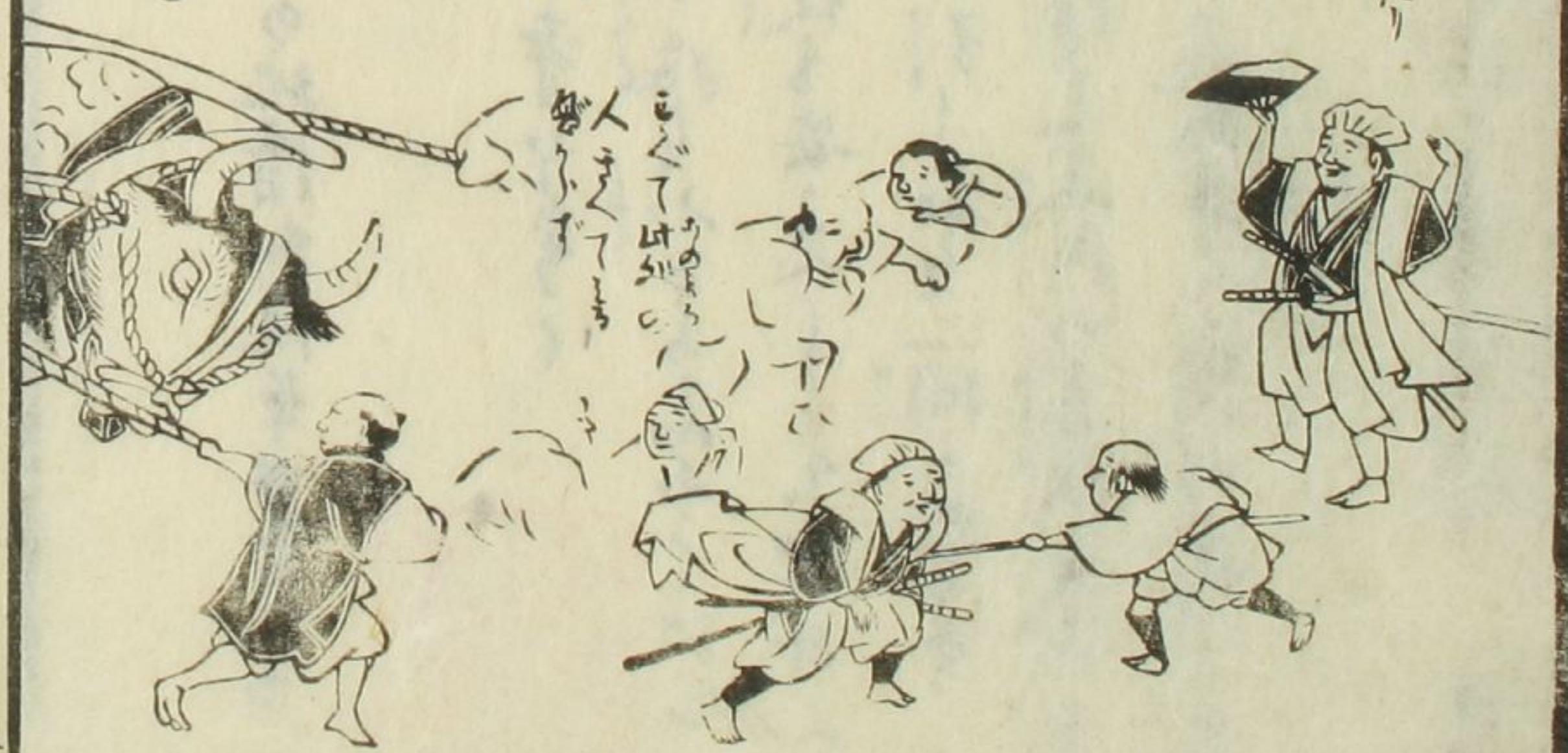
1307-1308年。延長院主。以成性。信田長末に命と。曰。若

行

寛文元年

外のえい利多<sup>トモダチ</sup>アツカミ

はかどり比丘尼<sup>ビクニ</sup>トモダリ



と歴々其功成。是度五年かく其功を終べて、汝等且まんとす。  
是年於諸侯會一會。先主至民の元師不貞。矛宗家及  
び乙人を召す。上佐九州信長本曾紀五壁也に監使二十人。上師二十六人  
擇く群國に遣して村本と伊豫も四國九國の全ち候の事。又大樹  
本代軒杖。射小家。寛き相小ありべし。伊勢尾張。至徳八人全候。且之  
久入村本と代五衆め。勢尼良素本名に列大坂。あくちひ承接へて。義虎  
の人をえむの館敷石植。祭山山号乃修造を和むべし。假と事。有度。此義虎  
相く。是が足也。九段小通す者。二十一段。かくこと高し。其一之達義也  
考す。其一之石植を考す。其一之祭山山号を考す。其一之達義也  
其底と晚。故从本源。とく。深腹とゆく。津。五軒石壁。鍔。五  
負。ら。印。从舟。巨舟を送じむ。にれ直盛。槽。急。内。接。當。等。等。等。等。  
幸。也。嘉慶。也。正川。主。馬首。同。富。主。事。時。也。前。堂。也。モ。ニ。一。テ。文。公。

高さ十六丈是曰式也。今取く遠りて、清澄之泉博今井家久と  
監も。池田備中ち。河寃犯る。上田を水に。小前も在し。來食焉いと上  
人をひく。そく学むらむ。裏山に堅て。即夙廬を。徳寺寺の邊。下拂りて  
是を監に。佛殿附く。缺つて。溝脛を塗る。巣ごへ。東をまく。接へ。纏と巨  
柱。繫車。引く。そく運ぶ。其巨柱。あらや。も支も。まぐれ。勤め。坐伏する  
べ。而も今百人の力。引く。そくと運ぶ。と。其工巧甚也。四方れん道を  
魁石。引く。に。其經丈の用。す。引く者。毎日。多。人。至

がとまつて東を水が伏ひてちかに隠ぐと四十間うちの本とすとひを  
祭るや一旦も法ちりやくすかく下がりたれの人自乃まわし肉通じ  
や又言ひて牛角うち火出でびよりは隠ぐと力とらむど  
し猛火盛し堂内もかゝ上トの石痕一面乃西大四方にあれ  
の猛烈を甚じて構わく、火風の樹一小隨りを仰ぐ行と抱く眉と  
一面の火をうけたる所よつてれ縁よまくの金一百枚の雷の音  
行と勝く、眉と擎るて透くのこ  
火をと勝く、火縁よまくの金一百枚の火を勝く、眉と擎る  
が土乃像并みる森ね燒くと大南の方へ回廊門乃四面回廊にて全  
火を燒失し、門乃四面の回廊とて、其燒くもとて、ふ南の方の回廊  
廊を東の方の迴廊とて西の方に燃ゆて、火をもろくうきりまく

○五郎丸抱止咽我辭之圖

北野社繪馬堂又招

伊豆國の住人伊藤祐高とりよ者あり。女を二人をりて嫁のまへ伊藤二郎  
祐高と云姓のすと伊藤祐高と云姓を晦のすとがく切づたるよし跡の  
子祐高と云ひて家を経し。後跡のす伊藤祐高。曾が家城姓を恨。

竊小祐達成呪咀に祐達成が死んだ時金丸車九郎と  
祐親よ来地乃び家系は席へ不令ながら捕へよし。祐親車を以てのふ  
令丸長をもとづか文の役を達成。家系は押忍。今丸は家系を尉  
祐達成を名代更に。お又がお約を情うて竊ま祐親を想。安え今年二月祐  
親は室の奥井木村と。家系が家主。近々小室とハ協シ即。赤波守よ体を  
祐親と相射る。矢を立て祐親が子。門は三郎祐亲と対殺。祐親めで故  
を挿りと近江ノ勝を早く通電して捕らへ。門は三郎が家をあとす

○伊勢翁社記と活葉录四年原五の事作於翁翁と翁年後翁は  
左庭にて即ち翁翁とつりふ。翁翁おとと珍い。後天正子と之をかみよ生孫と傳す  
え。うち一と、之浦翁翁はがまも。翁翁は女をひしき。翁翁の年と云ふ。う。  
翁翁、軍功か。その也然と義人たぐ。伊翁と  
即ち翁翁が作とくら。自翁

歲才の事。母少佐とち代よ告り。慶元後と一毛代曾我十郎  
祐誠と号す。時十八歳。若王を立節侍奉と号す。附十六歳幼きの  
聖成後元年代志。造次顛肺す。星をちふ。建久四年五月於羽卿室  
野小猪。後。法士皆扈從して被金戒持す。歲十載是代号ふ。富士  
乃毛将と。不義な事。射祐經も御供ふ。有司曰。曾我又牙又の傳  
祐之卒。此時と。五月廿八日十郎祐誠と。孫う障脣の邊  
と見廻。兵士着仗を出一て十帛と。宿成内ふ入て。子曰。祐之。吉は  
ほまの大岩内と。能君よ。歎と。酒あつて。育たる。子郎と見ゆ。嘆や。慶  
き祐經歴又の歎と。是夏今一人の邊。吉は皮財と。詮す  
ハ。夏。伊豆。猿河ノ人。役野五郎と。相撲。力争ひ。有し。祐親の半ひ。先  
詮す。し。あら役の宿。考。木村。射。也。射。也。先。考。木村。也。也。也。  
の。信守。信。も。今。うち。基。代。執。と。詮。後。御。詮。署。方。う。だ。何。と。恨。と。未

が。か。て。未。可。と。も。や。慈。ふ。祐。經。と。射。木。頃。ん。東。今。生。や。く。い。か。す。と。亮  
言。一。多。十。郎。と。懶。尺。玉。孫。う。報。言。お。拂。と。一。か。に。よ。か。と。ど。も。只。一。手。世。を  
破。ん。と。約。し。ゆ。る。を。志。雄。り。て。五。郎。が。恨。ん。と。不。使。う。と。何。氣。毒。死。侍。ま。主。ゆ。  
其。後。十。郎。と。村。千。鳥。の。直。垂。ル。黒。鞆。ハ。を。カ。代。佩。五。郎。と。蝶。書。く。連。年。一。  
余。氏。童。代。の。友。切。と。三。主。易。と。佩。陣。屋。く。と。敗。れ。宣。う。祐。經。陣。屋。ふ。あ。り。バ。  
お。朋。を。引。き。を。先。梯。上。と。く。見。す。が。不。義。射。祐。經。と。木。越。の。か。持。と。敵。ふ。大。敵  
肉。ふ。毛。序。と。鼻。う。口。耳。大。水。び。控。毛。御。湯。浴。古。猶。御。御。御。御。御。御。御。御。御。御。  
経。秀。我。を。故。ふ。持。ふ。う。折。御。と。御。う。ぞ。と。御。う。と。御。う。と。御。う。と。御。う。と。御。う。と。  
杭。え。の。木。代。取。ん。と。す。れ。と。子。郎。と。祐。經。う。み。の。肩。う。馬。う。の。孫。う。  
まで。通。り。と。亮。は。五。郎。も。腰。の。上。う。と。切。通。り。傷。に。掛。る。人。屋。内。一。年。と。  
隆。寺。た。奴。原。見。か。と。る。と。後。日。小。手。す。ふ。と。云。う。う。力。と。而。度。高。信。と。  
近。ま。代。十。郎。ま。と。意。て。切。教。に。か。と。逝。ま。と。御。ま。と。言。代。叫。と。モ。置。

寛永二十一年霜月吉日 山本理兵衛筆



宿坊能喜

奉掛御寶前  
諸願成就之所  
願主速水六兵衛白敬



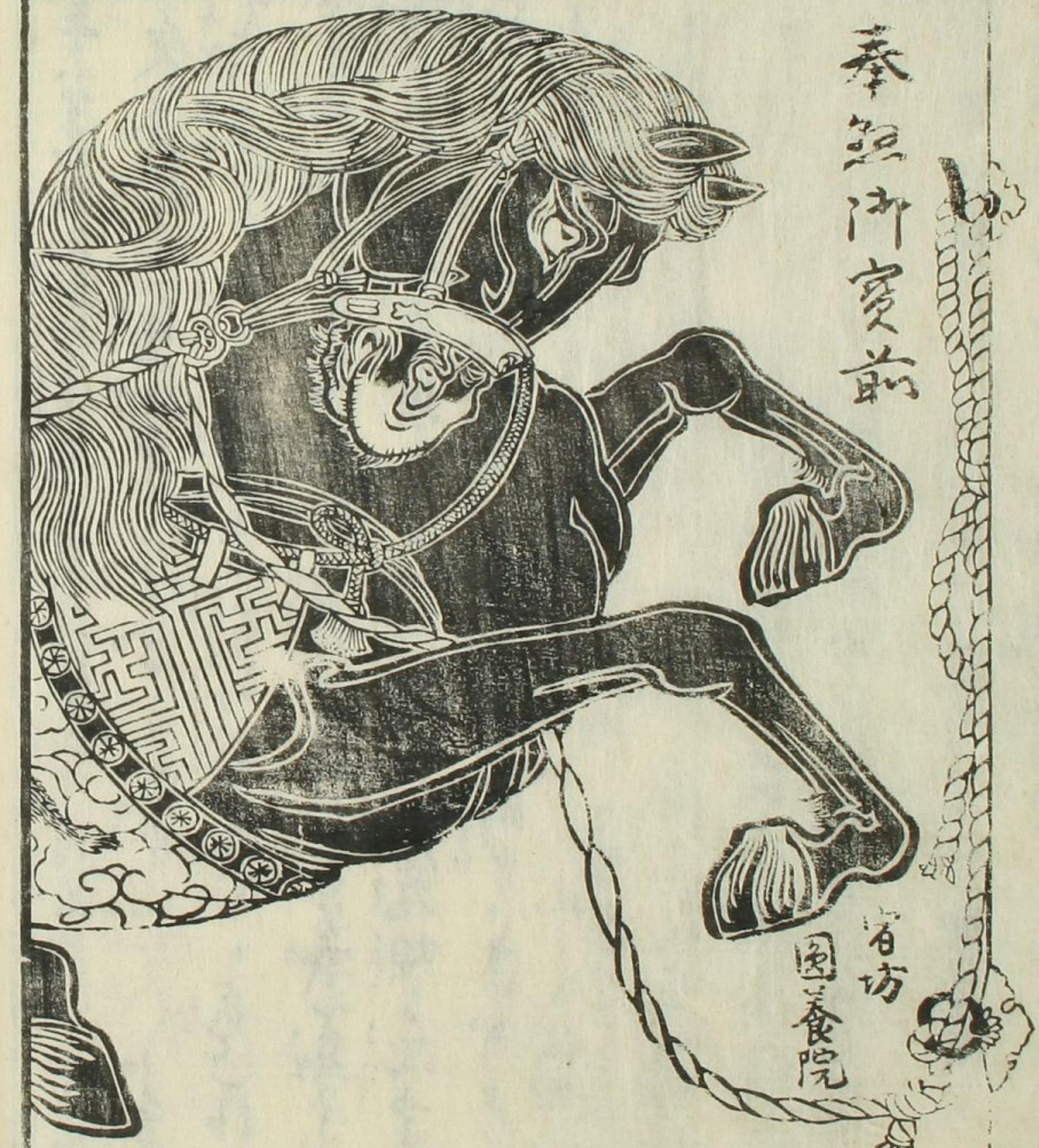
う。是年五月を過みて大音に住至岡住人伊庭二郎祐親が孫秀代  
十節宿同日立節 時家教の蟹立森は生時祐經を討取らと呼ぶ  
陣之役の外強劫一馬車小糸五馬の馬介ニ馬小糸甲節。立馬五節  
立節。四馬小糸小江糸。五馬に馬五六馬水か板山本節。七馬にみ誠八節。  
各初出立馬自て立馬ハ當小海走小本節。五馬と残立馬御。たまふ  
立田小節。十馬小印前人節を致いて封。安西才郎も社とぬの十馬  
云其外解弓射す。者翠才郎(重貞)二百八十錢人被よ目を裏御く。  
去ども其身金石を無、致ひ解と十郎を新田十郎右衛門と號す。幼紀  
以。節を極度没を遅て、川岸在の轄内中才人。立馬左と至力の主を  
脇衣」被れて轄の招よ仰。立節。女也と名打擅く詰りを立節丸立轄  
て時立馬を立馬と抱き而て押さんとすとども。狂力の時宗かしよ幼紀  
女也と名打擅く詰りを立節丸立轄

鞍馬之圖

清水寺卒堂東之方外陣す

奉無御寶前

官坊  
園養院



元永拾四年五月吉日

狩野綱敏助



○里人歌舞之圖 清水 美應四年

重名五紀

は國生ふべもよろびえ坐のくもよどび。遊ぶへ東京文趾の人ねうえ踊躍の舞  
もよどび。游ぶへ東京文趾の人ねうえ踊躍の舞もよどび。東京文趾の漢土境て西面の闇ふあら國。日年を海  
とす。百里洋の船とす。えを草とて走ゆる船とす。近來東京文趾と二國より  
船とす。國く年船とす。兩國の界にキヤンと云山。その國桂と云山。一弓  
とす。六丈の山を越す。とす。肉桂出だ人あら彼の唐人の船とす  
を船ふく。はれひの衣舟ふかく。人の舟をかへる。船と時計の雪子  
を船ふく。はれひの衣舟ふかく。人の舟をかへる。船と時計の雪子

奉掛御室

永應四歲

宿坊執行

歌中等侍處



足

卯二月吉日

滿今成願諸皆成就前

里人歌舞者とぬて  
あがめふが圓横  
文字と用ひて  
を皆著と用ひて  
お拂うて歌と  
支趾と東京文  
金と安南國と  
漢土まほい障云の  
事と用ひて歌と  
を皆著と用ひて  
車と車と人あ  
千百里洋とす



月代と別藝  
にひ男女ともに  
書とあくまし。  
女と日本の人と  
者ふ柳も。け園ふ  
假玉とす。漢土乃  
ト柳玉とす。漢土乃  
の文多云。用ひ。漢  
の郷淡少

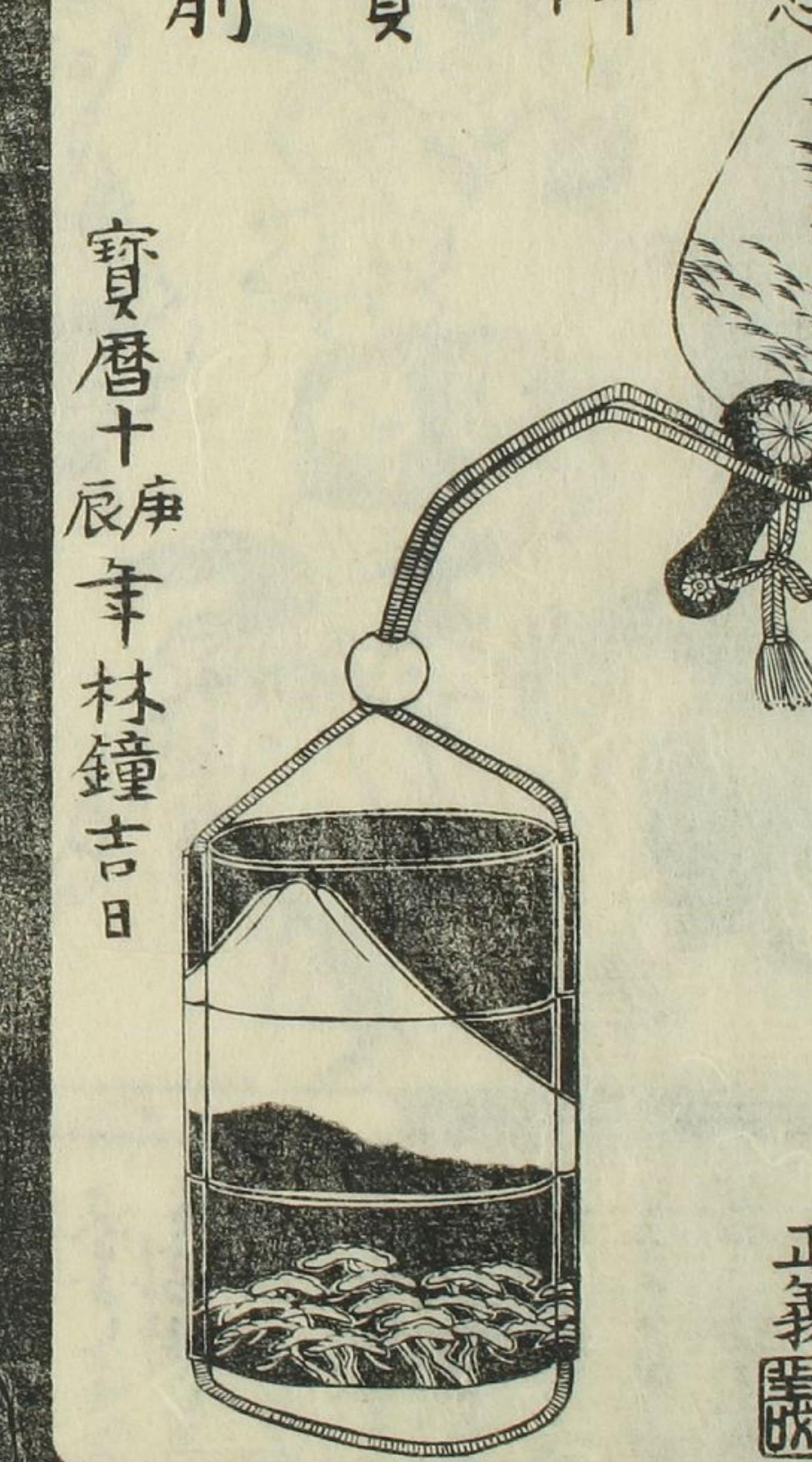
奉懸御寶前

御時繪師

願主鈴木庄左衛門制作之

正義

寶曆十辰年林鐘吉日



○卯之龍

上卯是あり 宝曆十年蔵絵師珍本庄左衛門の作

市内社を奉印刺肉を入れる具なり今蓋入る。直筆を入れて筆と筆箱とを直  
に毛筆をあわべて腰を下すて途中に筆の用とし。毛筆丹青筆を拂ひ筆を拂  
ひ毛筆を拂ひ其製丹青と拂ふ。墨瓶を拂ひ拂間毛筆と毛筆の毛筆を拂ひ  
目撫ふ。其製丹青と拂ふ。墨瓶を拂ひ拂間毛筆と毛筆の毛筆を拂ひ

○齊藤實盛篠原合戦之圖

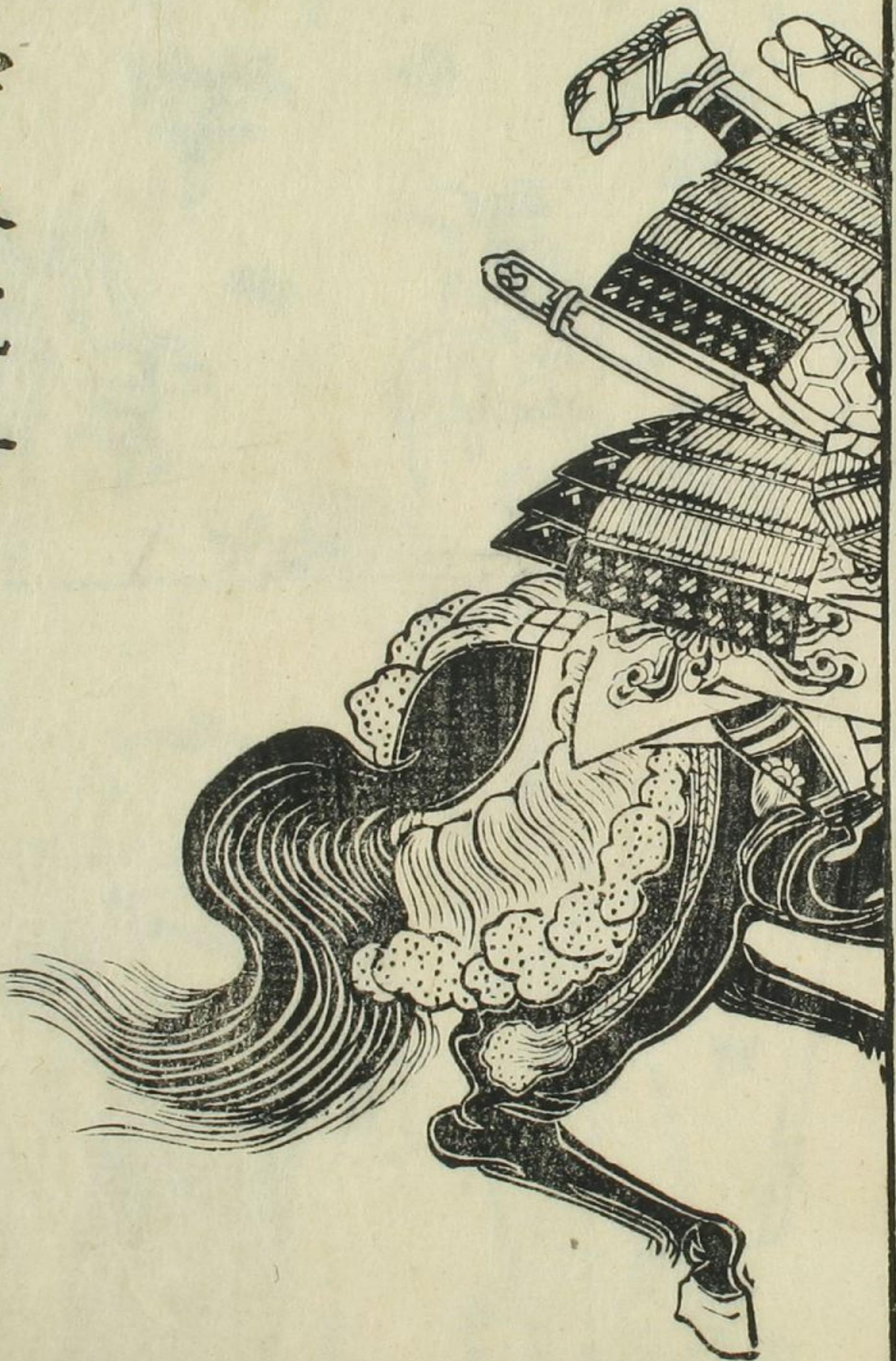
齊藤長井別當実盛を田村將軍の法胤裔板子節士実直より初の名の河合を  
郎吉入取房後赤坂一郎吉入取房後赤坂一郎吉入取房後赤坂一郎吉入取房後  
重盛が家と序て武藏武庫別当より長井卿に住と元吉重利古五郎義  
がふ人なり。一況よ赤坂家方より平家へ至る越前國  
○泰承二年赤坂義仲と征伐して平家の大将小松庭中が維盛た馬頭  
が盛を廢帝す忠度紙布と佐通盛三河守知成十万騎勢を率ひ加賀越前境  
俱利迦越山に發向し義仲と源氏小志保山を攻ひ平家殺ぐに打負谷を崩  
て了る者殺かば加賀國久門追く義仲敵死して篠原に残る平家又残り

寶永二酉年

五月吉日

宿坊

長吏  
宝光院



前川有右衛門  
願主大坂住  
京屋



加州多大八幡官宝庫

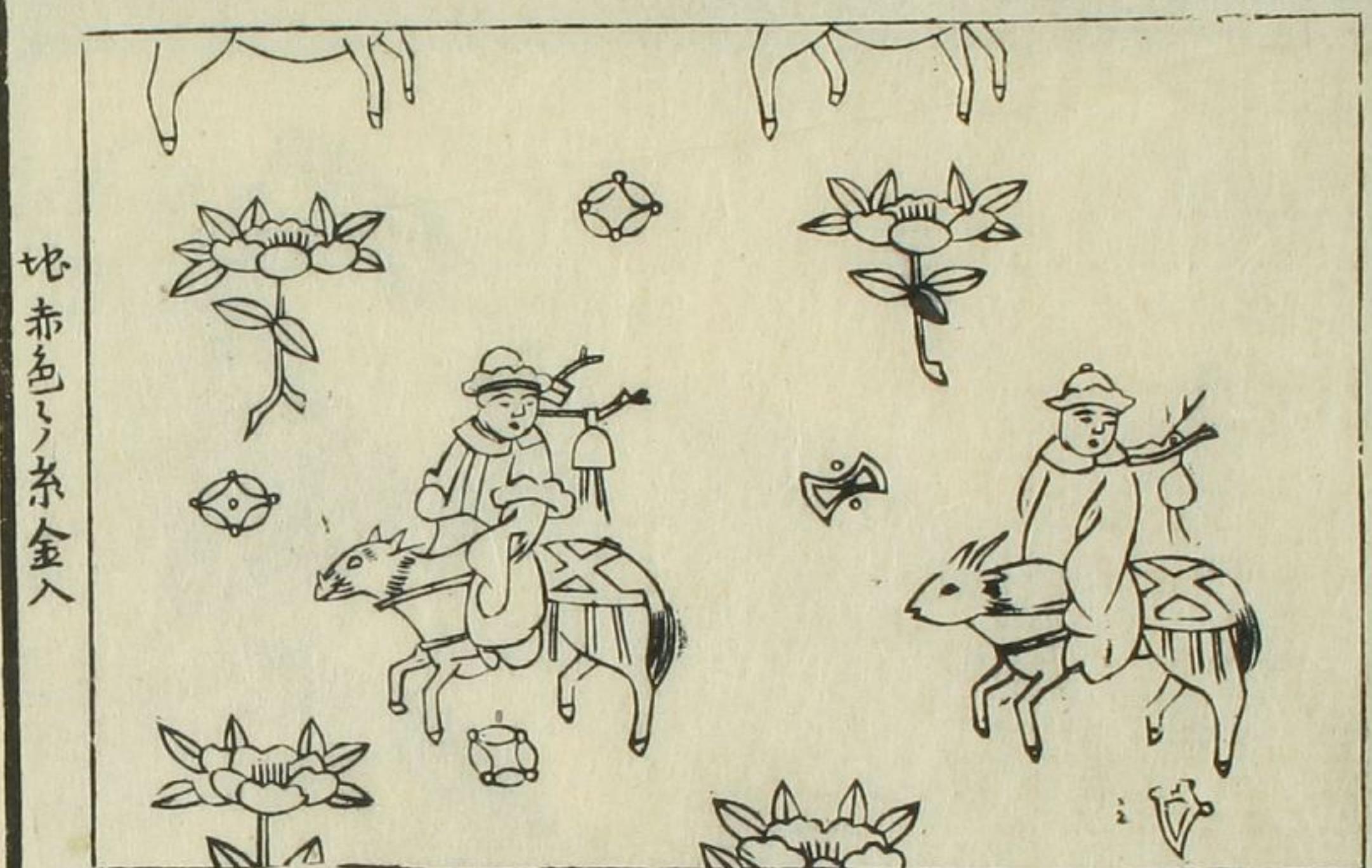
奇装宝盛兜甲大袖腰當

赤地綿直無之圖

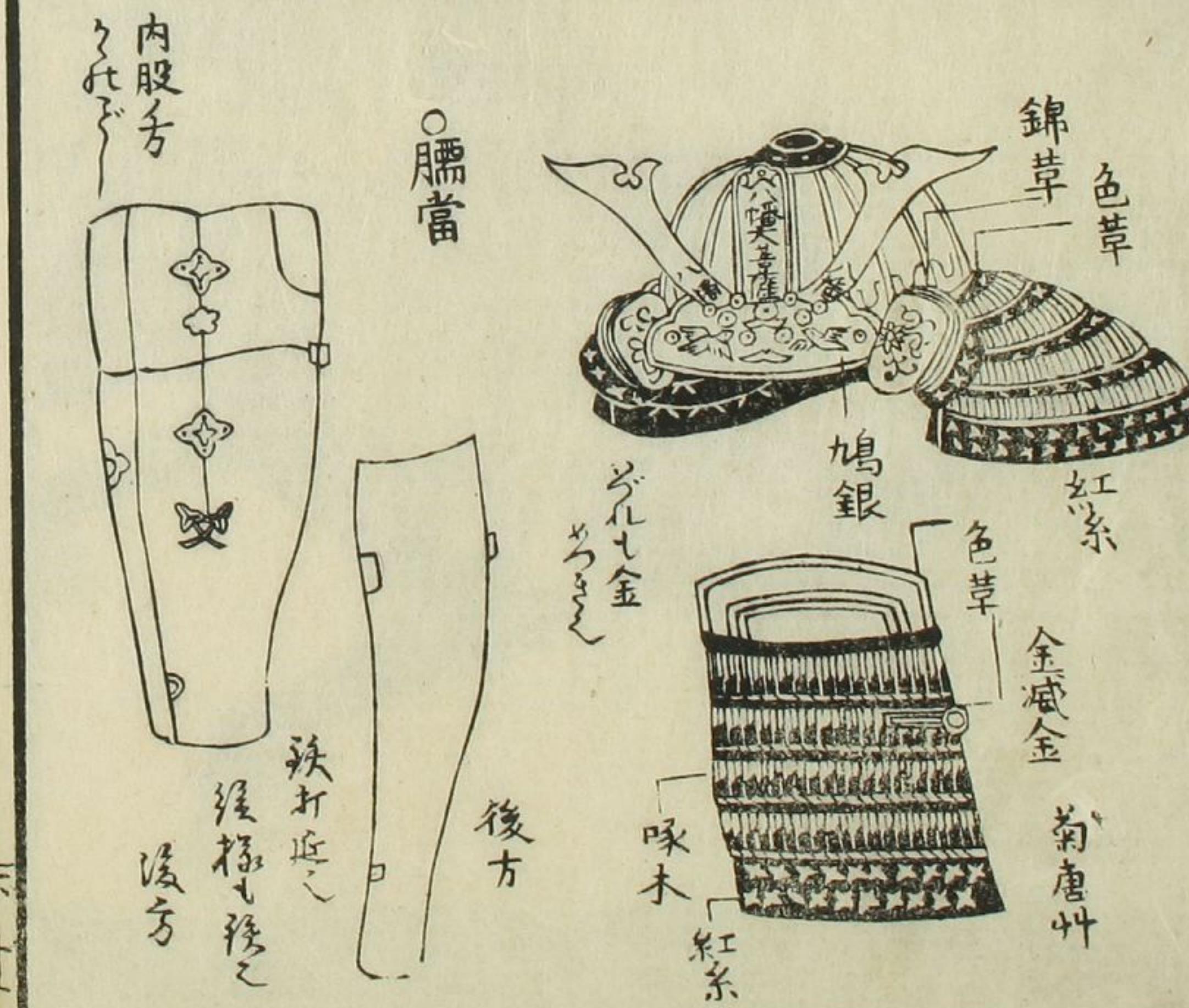
○赤地錦直垂切地文

○五枚胄威啄木

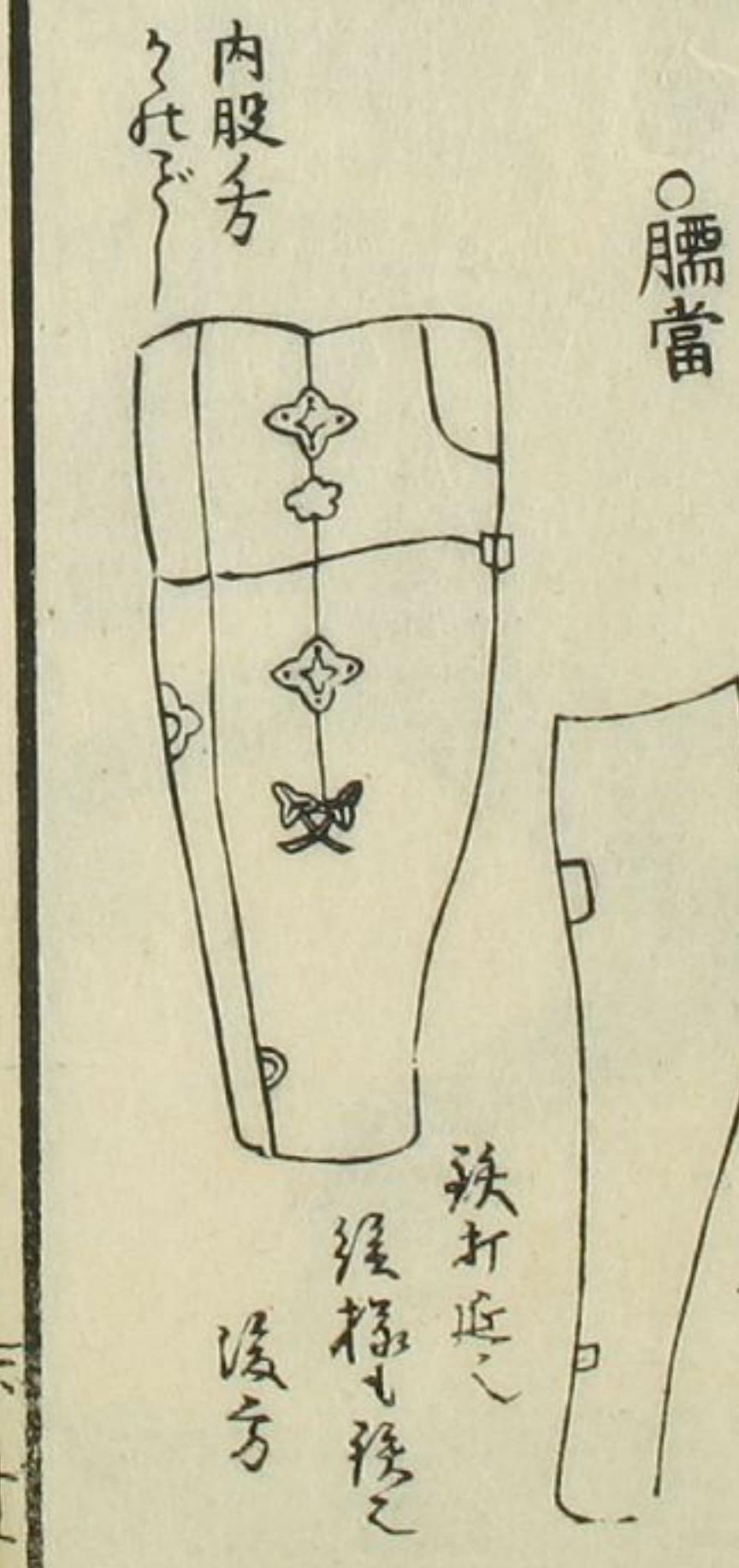
○鎧大袖



地赤色ノ糸金入



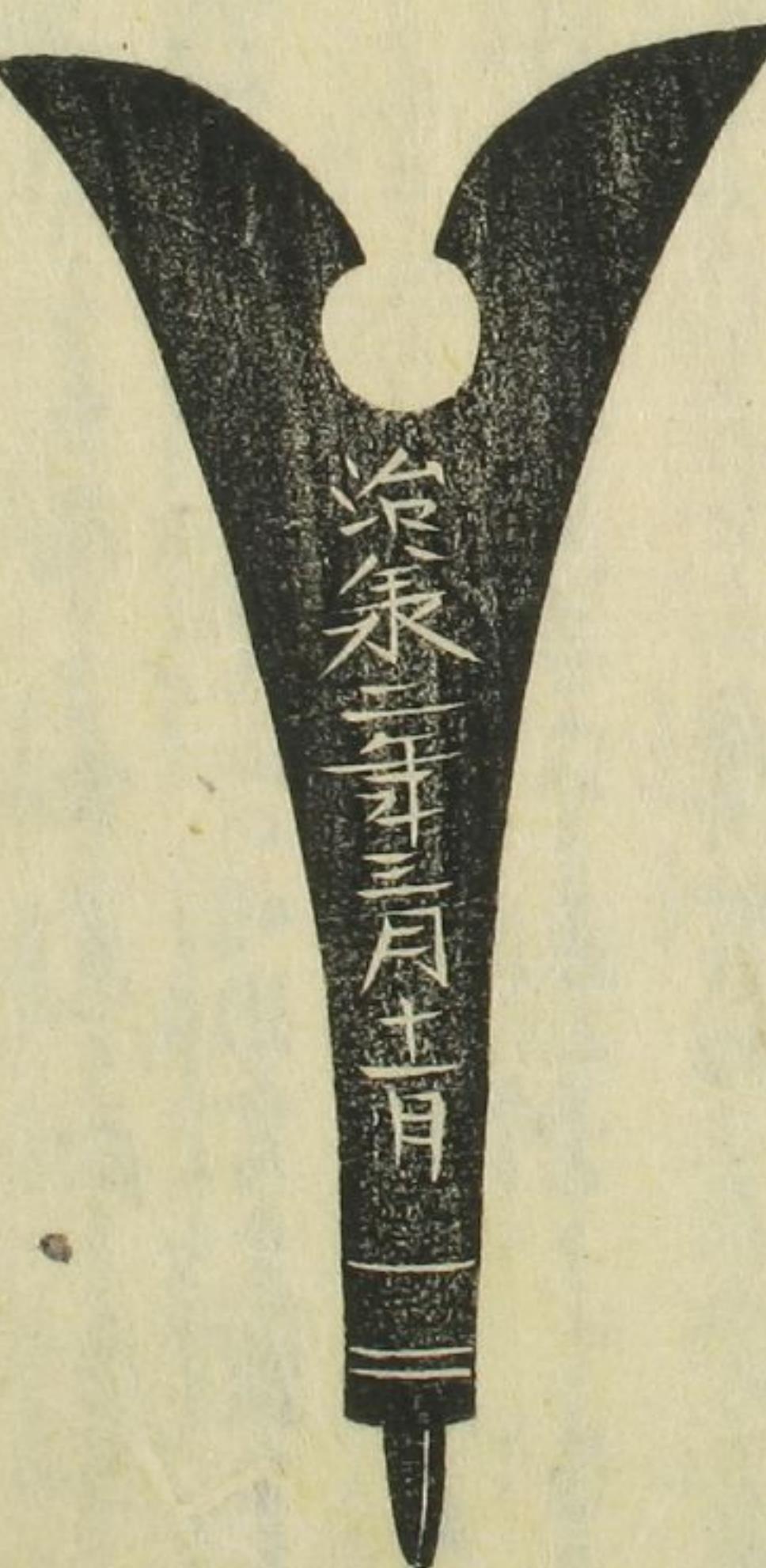
○腰當



後方

腰當

内股弓



治承二年三月土官

頃てお退く時小室盛七十三只一騎より今と信濃國の住人のゆき即ち盛  
政亮と組んで御家を即等に  
付やまと三室盛と組んで御家を即等に  
を捨んとすとよ様純真と云ふと組で二人馬うちより處室盛  
をよ處が節度を以て首ば斬り手塚甚ら不敵の手柄を忍んで上て其處

寛政五年正月奉納の時我仲添へ根裏に書一筆

身も汝の事  
身も汝の事  
身も汝の事  
身も汝の事  
身も汝の事

して首が面もお雪取のあふ持身もまよ曲者の首を取てひそまつて  
も名をあらば辯の重きと肩ひどぎわとなざりはく者もかく面見の紹老  
人を見ぬも歎美頗黒ずて壯士に等しくやに極に泣節を盡るを嗤で  
見せむる節義宣威也。首より下顎頬の黒を染め渠等ふまほ年老  
白髮かげりと口情ありや。人を傷めり競場をもとめぬ者とえを年元  
し長き事く考へ軍に向ふん時を發を墨ふ涅く哉見えあるもやが累  
してたれうそぞと首とほひてアリてば際より坐る患くは白髮も  
見ゆるま盛が満の重寄ばるまには又小圃に向の時内土官家盛などて  
玄古卿へ仰るとて仰て仰て玄古卿ありま盛年若處生國をもんぬ鶴乃  
重きる打の御夫を免るるを玄翁の御夫よひと再び下すとそぞもそぞ  
未曾敵を取鳥も七日計丈てあじまのとて縫の被ひゆれぬま盛が  
着うち免る渠が先祖を守るを則るハ後歴に後ひ後三年の歴より武功を彰

又停代金丸とて莫減を射一時後りに見立とばハ馬鹿の兎とアリとひれ  
旧傳清きに至る所止の事まは納史神社を寄附とほ風の開運をわら  
○今加川は瀬郡多岐の八幡社也舊姓の本名が尾原也  
義羽の名の兎とあざられと正とちんう  
本曾が主なる盛と七日の足とやうす半り義仲が又事力先生義質と通す  
を対する義仲もひまご二界にうちぬる出でて生立と被るまことに國七  
日秋水に匿ひ宿小木曾以達毛毛て危急に助國義と忘びて移  
まつまう上手家わむほ平盛義は法原抄要

○咸不湯に云或人云ま田間仲がる群と申す者にてまたけあり伊勢守  
う後もあらまに太の子され候ありと云ふか蟹を食候トニモ五  
事ト云也候うすれ候ち乃左近うてはあめ蟹が候うと云ふ其の家  
子の者云々年二十未満と云ひ此蟹は白見又云ば生目と云  
墨二枚重し一割十四方小刀四枚四枚  
門庭に立雲蟹がる群衆多益徳ア化全かよ  
事候もあらまに候候のゆゑに蟹の如く候事候事候事候事  
○賀圓は居那處をて今ス監督自院の候其上と申候て是が蟹

○今加州 那多をハ懽官の貯蔵庫に室々盛り入るの時、看守の兜甲  
大袖、膳當綿の直糸、義仲が木根と詫むて義仲が麻杖の文を

提及義仲祈禱所被甲錦直垂。并其甲表指矢納于能美郡  
多太神。恭頻年以來平相國混亂四海。荼毒萬民。故王業一  
日不寧。仰賴加我于神力。上為一人下萬姓。迄平家族。非是  
義仲為身謀。榮忝生芳馬之家。五常不全。為住惟称冥鬼。  
而作假源家之天依之就。多太八幡宮蝶屋庄十三町。永代合  
寄進之者也。仍添狀敬白。壽永二載五月二十一日。

源義仲

壽永二載五月二十一日

多太社之神領蝶屋庄十三町之處永代可守之者也

宰宮司殿

桶口次郎兼光義之

一派少佐の一梵刹より奉致する鹽が牌と安ば隣門よ揃治揃治の四字あり何と云古  
と知度一年に鹿苑の獨處乃封内にて鷹と捕其跡に小賊あり勤ては四字まと云と傳云  
松原の松原やふの彦と是も先の春日とし又浮よけ舟をそぞる者と特例ある難事  
と近世ゆきと舟船行幸と云

扁額軌範二篇下終

